コルネリオ会

（キリスト者自衛隊員の会）

ニュースレター　No.101

2003 年　3 月

「軍人キリスト者」国際大会雑感（その三）

元コルネリオ会会長　工学博士　今井健次

６．Naval Postgraduate School

海外の「軍人キリスト者」との交わりは、国際大会が主な場であるが、その外にも色々あるので、それらについて少し述べてみたい。

筆者は 1982 年 2 月から 3 月間米国カリフオルニア州の Monterey にある海軍大学院（Naval Postgraduate School）に交換教授として出張した。そこの海洋部門に米国 OCF の Cal.Danlap 海軍少佐がおられた。彼（愛称 Cal）は助教授であった。Cal とは数年前に、英国での国際大会の折に知り合いになった。そしてこの渡米の手続き等については色々お世話になった。Cal は少し前に奥様を病気で亡くされ、そのときは二人の息子と共に NPS の学校から 30 マイルほど離れた Salinas の町に住んでおられた。そしてこの出張期間、私の家内と共にきて共同生活をしないかと言われるので、私も喜んでそれに応ずることになった。そこで 2 月初めに家内と共にサンフランシスコ経由で Monterey に到着した。Cal はベンツのバンを持っており、又その他に本田のシビックを持っていて、それを使っても良いと言われるので、お借りすることになった。アメリカで生活するには、車は生活必需品と言われるほど便利なので、大変快適な 3 ヶ月を過ごす事ができた。

男世帯のところへ家内が入ったので家事の大部分は家内が引き受けることになった。Cal と私は毎朝車で NPS に通勤する。約 30 マイルを時速 80 マイルで飛ばすので２５分足らずで到着した。

私は Departnent of Aeronautics に属することになったが、私の研究はほかの部門とも関連が有ると言うので、先に防衛大学校に交換教授として来られたことのある Prof..Fuhs と、もう 1 人イスラエル国から派遣されていた Dr.Amichai と 3 人で Prof..Fuhs を長としてチームを組むことになった。

Prof.Fuhs は NASA（航空宇宙局）でも責任ある仕事を持っている有力な科学者で、NPS でも一段高い称号をもち、名刺には Distinguished Professor Dr. Allen E Fuhs と書いてあった。

Dr. Amichai の名刺は、所属はイスラエル国防省で Head of R&D Department, Dr. Oded Amichai となっていた。彼は今回ラム・ジェットの研究のために PGS に来て Associate Professor となっていた。彼は熱心な愛国者のようで、課業の合間を利用して昼の休みの時間に学生や職員を集めて集会を開き、西暦 70 年頃ユダヤ滅亡の時、死海のマサダ砦でユダヤ人が最後まで戦って、力尽きて全員玉砕したことを熱烈に語った。今時此処でこんな話を聞くとは、私にとっては以外であった。NPS の学生は海軍士官なのだが、私服で通学するので全く目立たない。NPS には 70 人位入れる礼拝堂があり、海軍士官のチャプレンがその管理をやっておった。日曜日には 11 時から聖日礼拝が行なわれた。十数人からなる聖歌隊があって、毎週違った歌を歌うので練習はなかなか大変だろうと思うが、何処にでも熱心な信者は居るものだと思った。礼拝前には OCF の人たちが集まって聖書研究会を行ったが、毎週十数人は集まっていたようである。会員が輪番のように司会を担当して聖書を読み、それに付いて一人ずつ感想をのべるという形で、一時間半の時間は瞬く間に過ぎた。

Cal は米国 OCF の幹部だったので、その関係の色々な集会にも出席していた。それに関連して私も共に行動

することが多く、場合によっては彼の代行を頼まれて私だけが出席することもあった。それらに付いては次回に説明しよう。（続く）

桜といちじく

ミャンマー　コルネリオ会　会長　S.Khup Chin Pau

2002 年に東京で開催されたＡＭＣＦ大会の説教の最後に池田牧師は壇上でひれ伏し、先の世界大戦で日本軍が行なったことへの赦しを乞われました。
私の心はインド国境の近くのテディムの私たちの仮避難所を思い出しました。そこで１１歳だった私は初めて長い剣を持った長い髪の日本兵たちを見たのでした。私は彼等を恐れ、憎んでいたことを思い出しました。

戦後２４年にして、私はインパールの同じ道を旅しました。それは不幸な運命にある第３３部隊がインドへの侵入の途中に通ったテディム道路（ＭＳ１０２）ですが、私はたくさんのいちじくの木が枝を広げて美しくずっと続いているのを見て大変驚きました。日本の桜の繊細な美しさに匹敵する荘厳さでした。

人がすんでいる所から、こんなに遠く離れたジャングルの道に一体誰がこれらのいちじくの木を植えたのでしょうか？　死にかかっていた日本兵だと聞かされました。そして不運な第３３部隊の兵士達は草の実やいちじくを食べなければならないまでになった事、彼等の何人かは私たちの民族が『お母さんのミルク』ト呼ぶ美味しいいちじくのお陰で生き返ったこと、しかし未熟な青い実しか得られなかった兵士達は、下痢をして、道端に苦しみながら、悲しみの『種を蒔いた』のだということを聞きました。

その道から戻って、生残った兵士は極わずかでした。然し、この苦しい試練から、奇跡の命が芽生えました。やがて種は若木になり、日本兵の祖国の桜の木のようにたくさんの葉を茂らせて、後世の旅行者たちに、日蔭と果実を与え続けているのです。

今日、私たちがすべての苦しみと悲しみの和解と赦しを探し求める時、遠くビルマのジャングルのいちじくの木と日本の桜が、私たちにとって、世界の善意と美のシンボルとなりました。

馬掘聖書教会　繁田春代姉　訳

日本宣教のビジョン

宣教師　金　学根

「私は、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。出来るだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、私自身はそうではないですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。」

（Ｉコリント 10:19-20）

私は、日本に来て 16 年目になります。私の両親は、大変熱心な信仰の持ち主でしたので、厳格な信仰家庭の中で育てられました。今、思えばある意味では、キリストの兵士のように信仰に対しては妥協を赦さないただ、キリストに従い信じる信仰のみ許される厳しい家庭でした。

わたし自身も、韓国でも最も厳しい海兵隊での軍人の経験をしておりましたので、軍の厳しさは知っております。しかし、私たちが信じるキリストの信仰を持つと言うことは、ある意味では簡単でまた、ある意味では兵士より厳しい戦いがあると思います。妥協の許されないキリストへの信仰と、私たちが属する家庭や職場、隣人に対して忠実になること、私たちには自衛隊や国に対して忠誠を果たすことや隣人や人を愛す心を持つことがそう簡単な事ではないことと思います。

しかし、神は、私たちを愛してくれました。私たちが愛したのではなく、神が罪人である人間を愛してくれたのであります。神が人間のために死ぬほどまで愛したように、その愛を受けている私たちは、神を愛し、隣人を愛しすべての人にそのキリストの愛を伝えるべ

きであります。それだけではなく、私たちが属している国のためにも忠誠を果たして国を愛すべきであります。

今日の私たちの社会は、いろんな問題を抱えております。国にも様々な政治的問題があります。しかし、私たちはそのようなことに心を奪われずに、キリストの愛を持って互いに愛し合い、神の愛を伝えるとともに国を愛するべきではないでしょうか？また、私たちは、だれに対しても自由ではありますがすべての人に奴隷になるということは、できるだけ多くの人を得るためであるという聖書のみ言葉のように、私たち信仰者は、神のみ言葉と愛をもって、どんなことやどんな人にも接し、そのようになるための心構え常に持ち続けることが大事ではないでしょうか？少なくとも私はそう信じております。

私が、コルネリオ会（Japan Military Christian Fellowships）と初めて関係を持ったのは、95 年度の「軍人キリスト者アジア大会」でありました。この当時から、日本の自衛隊宣教と言うことが如何に困難で大変であることかは認識しております。日本の宣教は難しいと言われますが、特に日本の社会の中では一番難しいところは自衛隊ではないかと思うのは私だけではないと思います。しかし、どんな状況でも、あるいはどんな人にも神の愛は必要であり、伝えなくではならないのです。私たちは地の果てまで福音を伝えなくてはなりません。私たちの地の果てはどこでしょうか？世界で一番宣教が難しいと言われているのが日本です。その日本の中で一番難しいところが自衛隊の中です。と言うことは、神様が一番喜ぶことではないかと思っております。

私たちがやるのではありません。主ご自身で、神のみ業を成しどけられることだと信じます。私たちはただ、福音を恥ずかしく思わず、主を信じキリストの愛と福音を伝えることです。そうすれば聖霊様が成しどけられることでしょう！

私は、昨年の 12 月 27 日に防衛大学学生と共に韓国に行ってまいりました。そこで、私は新たな多くの可能性を体験することができました。不安の中で、自分の力や能力、時間やお金も私には何もなかったのです。しかし、唯一、神の福音、キリストの愛を何とかして日本人に触れさせたいと言う一心でありました。関心や願いがあっても、深い関心を持って自衛隊宣教を協力しようと言う環境もまだない中で何の力もない人間が何ができるだろうか？だれも期待も望んでもなかったと思います。私自身もそうであったでしょう。とにかく何があっても、伝えようと言うことで、何にも考えず、主を信じて進めました。

しかし、驚くことにすべては主ご自身がなさる業に私自身が驚きました。主がすべてを備え、主自らがみ業を現してくださったのでありました。彼らは 3 泊 4 日の中で神様の愛に触れキリストの愛を知らせられたのでありました。そしてキリストを知ることの祝福を受けられたのであります。私たちが許されたように、キリストの愛を持って愛を示した時彼らも、キリストの愛を知ることができます。そのことを皆さんにもご紹介し、喜びを分かち合えたら幸いだと思います。
キリストの赦しと愛がいつも皆さんと共にあり、神様の祝福豊かにありますよう祈ります。

人はみな草のようで、その栄はみな草のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることはない。

（ペテロの第一の手紙 1 章 24～25 節）

韓国旅行参加者

礼拝参加風景

聖書と私（第１回）

コルネリオ会会員　ブラジル宣教師　下桑谷　浩

私が「聖書」なる書物を手にしたのは、十四歳のときで、敗戦後一年、焼野原と食糧難、貧のどん底にあり、聖書も粗末な紙で印刷されていた。黄色の表紙には、「ヨハネ伝福音書」と書かれていた。こともあろうに私は「ヨハネ・でんぷくおんしょ」と読んだ。正しくは「ヨハネでん・ふくいんしょ」である。

当時の故郷は、電気もなく、車も入らない北茨城の山奥で、学業のかたわら、父の農林業を手伝い、遊びは山や川で、ぞうり履きの通学という文化生活。ですから、「ヨハネ伝」が聖書であると分かったのは、14歳も後のことであった。

その後、実家の改築で「ヨハネ伝」は焼かれてしまい、おまけに中身は開かずじまい。しかし、そのヨハネなる「黄色い本」は、私の心の中で、光り続け、燃え続け、ますます、輝きを増しているから、まったく不思議な書物である。

会計報告（アジア大会関連報告）

昨年８月15日～17日にわたって実施された「防衛関係キリスト者会アジア大会（グランドヒル市ヶ谷）」には多くの献金と祈りをもっての協力を賜り本当にありがとうございました。

収入

No	項目		金額
1	国外参加者		\3,027,000
2	国内参加者		\760,500
3	献金額	席上献金　8月17日	\234,324
		献金箱	\14,130
		大会中	\129,000
		大会前/後	\3,092,000
		特別献金（海外から）	\393,663
4	Tシャツ売上		\58,500
5	写真売上		\11,380
6	利子		\25
			\7,720,522

支出

No	項目	金額
1	宿泊費	\1,967,845
2	ホテル内食費	\1,647,743
3	会場費	\530,145
4	招待費	\688,000
5	講師謝礼	\400,000
6	通訳者謝礼	\210,000
7	奏楽者等謝礼	\327,888
8	交通費･食費負担	\365,553
9	通訳システム	\800,000
10	ツアー関係	\225,480
11	事務通信費	\348,897
12	広告費	\0
13	大会記念品代	\62,947
14	写真費	\35,780
15	報告書	
16	繰越金	\110,244
	合　　計	\7,720,522

献金感謝　（2002.10.17～2003.3.20 現在）

今回も多くの愛する兄弟姉妹から尊い献金をいただきました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

（敬称略）

足立順二郎、滝口厳太郎、後藤茂光、伊藤忠臣
鈴木建一、長濱貴志、石川　信隆、長橋　和彦･晴子
山下　和雄、圓林　栄喜･さゆり、広田　具之

対外献金

以下の Gp または個人に献金いたしました。

① ミャンマーS.khup Chin Pau 会長へ
　コルネリオ小児クリニックのために　100$
② 下桑谷宣教師へ
　宣教の働きのために　100$
③ モンゴル　Odondtugs 兄
　Mongolia Campus Crusade Christ のために　100$
④ 聖一教会
　韓国宣教旅行　感謝献金　100$

会員近況

石川信隆教授は、３月３１日で防衛大学校を退官されました。これまでの防大聖研でのご奉仕を感謝しますと共に、恵子夫人共々の健康が守られるよう、またご家族の上にも祝福をお祈り下さい。

（祈りの課題）

石川先生退官後の防衛大学校での聖書研究同好会のためにおいのりください。

皆様のご意見、ご感想をお待ちいたしております。匿名でも結構です。自由なご意見をお寄せ下さい。

（編集子）